

【京都市営地下鉄賞】

作品タイトル「深夜、四条通にて。」

作者…東風谷アオイ

自粛要請が解かれ、徐々に新しい生活様式が浸透してきた六月半ば。タケルと予定を合わせて呑みに来たのだが、ついつい酒が進んでしまい、キャパオーバーしてしまった。ついでに終電の時間もオーバーしてしまった。コトキンライナーは休止中だと、ニュースでそう話していたのを覚えている。我々二人は、おぼつかない足取りで、四条通を歩いていく。

「すまん、タケル。ぼくが飲み過ぎてしまったばかりに」

「ええつて。オレも久しぶりに飲めて、楽しかったわ」

しゅんとするぼくに対し、タケルはニイと屈託無く笑った。勿論、笑顔そのものはマスクの下に隠れているのだが。けれど、久々に見る、生の笑顔。生の声。

……ここ最近、面と向かって話をする機会が、全く無かった。大学の講義はオンラインに変わり、バイトは無くなり、何処かへふらりと出掛けることも、妹が友人を家に連れてくることも無くなった。

当初こそ、新しい時代の流れを受け入れていた。三密の回避、ステイホーム、ソーシャルディスタンス、デジタル化、等々。実際、趣味に割ける時間が増えたとし、家から出ずに何事も済むのは良かった。合理的だから。

しかし、目を追うごとに、胸の奥底に、形容し難い蟠りが溜まってきていた。

講義を真面目に受けていても、デジタルガジェットと向き合っている、デリバリーで有名なお店の料理を注文し食べてみても、それは解消されなくて。

一回だけ、それがスウと減少したことがあった。確か……。

「リモート飲み、したよね。だから正確には、久しぶりでは無いんじゃないか？」

「ああ、あれも楽しかったなあ」

少し前、流行っているらしいからやってみいひんか、そんな誘いをタケルから受けた。もつとも、機材も無くやり方も知らないままでの提案だったから、苦笑しつつスマホを通じて色々指南した。ぼくも興味があったから。紆余曲折あったが、無事に環境は整い、リモート飲みを行った。新鮮で楽しかったし、蟠りも幾分かは軽くなった。けれど、次またやろうという話は、出てこなかった。少なくとも自分には、モチベーションが無かった。デジタルガジェット絡みの話だというのに、熱は一回きりで尽きてしまった。なんだ、こんなモノなのか、と思ってしまった。

当時は、自分がどうしてそう感じたのか、分からなかった。けれど、こうして久方ぶりに家を出て、タケルとお酒を飲み交わし、面と向かって話をする事で、分かってしまったのだ。

他者の温もりを欲していたのだ、と。

デジタルを通じて、人々は気軽にコミュニケーションを取れるようになった。買い物も楽になったし、あらゆる情報を簡単に手に入れられるようになった。自分もそれにどっぷり浸かっている人間だ。デジタルが生活を楽にする、諸問題を全てを解決する、あらゆる物事を代替できる、漠然とそう思っていた。

しかし、実際はどうだ。ネットを通じて話が出来ると言って、きっぱり逢わなくなるわけでは無い。買い物だって、書店や服屋にふらりと立ち寄って、意外な発見や偶然の巡り合わせを楽しんでいる。旅行だって、ディスプレイで見るとは、誰かと一緒にその場へ行って見た方が何倍も有意義だ。

この情勢はぼくに、そんなリアルな出来事の大切さを、デジタルでは替えが効かない、人の生の温かさを、痛感させた。リアルを擲ってデジタルで全てが完結できるとは、到底思えなくなってしまう。デジタル関係を学んでいるぼくが、そんな結論を出してしまうのは良くないのでは、とも思ってしまうのだが。

居酒屋のガヤガヤした音。お酒と味の濃い料理の匂いが混じり合った空気。タケルの声、仕草、笑顔。それらは、デジタルでは再現しようのない、ディスプレイ越しですら伝えきれない、むき出しの現実。全く合理的で無いのに、蟠りはすっかり解消されてしまった。だから、調子に乗って飲み過ぎてしまったのだが。

「やっぱ、顔をつきあわせた方が、何かと楽しいもんだなあ。お店にも、早くお客さんが戻ってきて欲しいわあ」

「……ああ、そうだね」

しみじみと呟くタケルは、ぼくと同じ事を考えていたようだ。クスリと笑い、首を縦に振る。

現実での繋がりをもっと大切にしよう。そんなことを考えながら歩いていると、目の前の居酒屋から女性が小走りで飛び出てきた。危うくぶつかりそうになる。寸でのところで女性が身を翻し、すうりと通り過ぎる。

「大丈夫ですか？」

咄嗟に、声を掛けた。たとえ衝突していなくても、無駄な動作をさせってしまったことには間違いない。

「大丈夫ー！　っと、あれ、おお、久しぶりやなあ、君」

女性はぼくの方を振り返りながら走って行くとしたが、ぼくの顔を見るや否や、つんのめりながら立ち止まり、こちらに近づいてきた。

「なんや、陵の知り合い？」

「ええっと……？」

どうやら、女性の反応的に、ぼくとは面識があるようだ。言われてみると確かに、見覚えのある顔立ちだ。しかし、果たして誰だろう？

「ミサちゃんのお兄ちゃんでしょ？　ミサちゃんと仲良くして貰ってる太秦萌の姉、麗で

す。片手で数えられるくらいしか会ったことないから、覚えて無くてもしやーないわな。以後お見知りおきを」

丁寧な頭を下げられた。かと思うと、がぼりと起き上がり、眉を顰めながら口を開いた。

「そんなことより、君ら急がなくてええの？ 終電無くなるで」

「もうさつき無くなったはずじゃ……コトキンライナーだって、まだ無いですし」

だから途方に暮れながら歩いているのだが。すると彼女は、クスリと笑った。

「コトキンライナーなら、この前再開したやん！」

「えっ」

意外な事実を目をしばたかせると、隣でタケルがスマホを開き、「あ、ほんまや」と呟いていた。

「さあ、走らんと本当に夜道をとぼとぼ歩くことになるで！」

「ほなら、いくで、陵！」

「言われなくても！」

一斉に、四条通を走る。果たして、コトキンライナーには間に合うだろうか？ 一種のズリルな賭けに、胸が高まる。このドキドキも、デジタルでは決して味わえないだろう。

【佳作】

作品タイトル 「幸福に触れた日」

作者…新木楨

――あ、学校に傘忘れて来てしまった。

乗換駅の地下鉄烏丸御池駅構内、太秦天神川行きホームにちよんと備え付けられているオレンジ色のベンチに腰かけて、太秦萌は大きく溜め息をついた。

昨夜遅くから降り続いていた雨は、天気予報通り昼過ぎから止んで、空はからりとした秋晴れに表情を変えた。

今日は傘の置き忘れに気をつけましょうね、と、お天気お姉さんが笑顔で忠告してくれていたのに。

下駄箱脇の傘立てに置き忘れた傘は、明日回収するしかないだろう。

――たしか、明日も雨の予報やったなあ。天気予報ってあんまり外れへんし、しゃあない、折り畳み傘で出かけるしかないかあ。

うむむ、と唸る萌の周りから、急に人波が引いていく。電車が来たのだ。

背後でアナウンスが流れ、ややして六地藏行の電車が東へ走り去っていった。

萌の住む太秦行き電車も、もう間もなく到着する。

電車待ちの列の最後尾に並ぼうと立ち上がった萌は、何かにつまずきかけて、「あれ？」と思わず声を上げた。

「傘の忘れ物……？」

ベンチに引っ掛けられていたのは、丁寧に畳まれた赤い長傘だった。差して歩けば雨降りの憂鬱がどこかへ吹き飛ばされるような、はっと目を惹く素敵な雨傘。木製の柄からは赤い房飾りが垂れ下がり、あまり見たことのない細工だった。

今の反対方向の電車に乗っていった乗客が忘れていったのだろうか。

しかし、萌は隣に座っていたOLらしき女性が、電話をしながら慌てて立ち上がり、ヒールを鳴らしながら足早にホームを後にしたような記憶が臍げに残っていた。

萌は少しだけためらったのち、階上の改札の方角を見つめて、ひとつ頷いた。

帰宅する人の流れに逆らって、肩を竦めながら階段を駆け上がる。

少しだけ長い階段を昇りきって、改札口の前に立った萌は、そこで途方に暮れて、きよ

ろきよると辺りを見回した。

改札を出ると、出口は四つに分かれてしまう。

――赤い傘、赤い傘！　お願いやから、持ち主のお姉さん、気づいてえ！

傘を掲げるようにして軽く振ってみるが、足を止める人はいない。萌の様子に気づいた人は、怪訝そうな顔をして首を傾げ、通り過ぎていく。

頬を赤くしながら、なおも傘を振る萌に、

「あれ、萌ちゃんやん。どないしたん？」

救世主の声が掛った。

「タケルさん！」

「学校帰りなん？　家は天神川の方やったっけ。俺とは反対方向やなあ」

萌の幼馴染である小野ミサの兄、小野陵の友人の十条タケルが、満面の笑顔を浮かべて立っていた。

陵とタケルも、きつと萌とミサ、そして松賀咲の三人と同じように『親友』なのだろう。見るからにタイプの違う二人は、片方が大学生、もう片方はパン職人の見習いになったというのに、よくつるんでいる。

姉の麗と二人姉妹の萌は、もし自分に兄がいるならタケルのような人がいいな、と思っている。彼の持つおおらかな明るさは、萌を温かい気持ちにさせるのだ。

――そうや、タケルさんに相談してみたらどうやろ。大人やし、わたし一人で悩むより、きつとずっといいアイデアが浮かびそう。

そう閃いた萌が口を開くより先に、タケルが赤い傘を指さした。

「んん？　萌ちゃん、その傘どうしたん」

「さつき、ホームのベンチのところで拾ったんです。たぶん忘れ物やないかと思ひます」

「俺、その傘知ってるわ」

「ほんまですか！？」

「うん」

にかりと白い歯を見せて頷くと、タケルは顎の下に拳を当て、少し考えこむような顔に

なった。

「俺の働いてるパン屋の常連さんが、それとおんなし傘を持ってはる。すぐく大事にしてる傘だとかで、もし店の外の傘立てに置いておいて誰かに盗まれたら嫌やからって、丁寧丁寧に雨粒を払って、肌身離さず持ち歩いてはった」

それを聞いて、萌は目を二度、三度とまたたかせた。

「……そんなに大事にしてはったなら、忘れたりせえへんですよね……」

「せやな。でも、その房飾り、台湾のお土産だって話してたのを聞いたことがあるから、やっぱりうちの常連さんのやと思うわ」

二人して首をひねりながらも、やはりこの傘はタケルの店の常連の女性のものだという話に落ち着き、萌は彼に傘を託し、地下鉄に乗り込んだ。

電車に揺られて、黒い車窓に映る自分の顔を見つめながら思索する。

——お店の中にまで大事に持っていく傘を、なんで駅に忘れはったりしたんやろ。

大秦天神川駅到着のアナウンスが流れた。

改札をくぐり抜けて長いエスカレーターを上り、ロータリーを越して嵐山の方角へ歩きながら、萌はまだぼんやりと考えていた。

西の空、嵐山の山あい、オレンジ色に染まっている。マンションや建物に阻まれても、残照や朝日を覗き見ることのできる盆地の京都市が、萌は好きだ。

まばゆい陽光の残滓に目を焼かれそうな西の空、太陽の切れ端が袖を振っている。

夜の訪れを思わせる重い橙に染まった雲がたなびく嵐山。

この光景は、萌にとっては当たり前だけれど、京都で生きていない人にはそうじゃない。雅やかなのに人なつっこくて、情に厚い。バスに乗ればおばあちゃんが「あんたたち、どこへ行かはるの」と、ふくふくとした笑顔で尋ねてくる。

——ああ、そこならわたしの実家のすぐそこやわ。昔はバスを乗り継いで出町柳まで出なならんかったんやけど、今は地下鉄が出来たから便利になったわあ。あそのみたらし、食べはったことある？ 言うてる間にバスが来たわ、はよ乗り、楽しんできはってね！——

萌の暮らす町。

大好きな京都。

そんな町に似合う人間に、萌はなりたい。

三本鳥居のお社に程近い我が家の扉を開ける頃には、ひどく幸せな気分を満たされていた。

「ただいま！」

※ ※ ※

翌日の早朝、タケルから入ったメッセージには『傘の落とし主、お店に来てくれはったよ！ 萌ちゃんにお礼をしたって言ってはった』と書かれていたが、萌としては持ち主の手元にあの傘が戻ったことが分かっただけで満足だったから、『お気持ちだけで充分です、と伝えといて下さい』と、お気に入りのスタンプと共に送って画面を閉じた。

それから幾日か経ち、気持ちはすっかり中間テストに向いていた頃、タケルからメッセージが届いた。定期的に送られてくる新作パンの案内だ。

パッションフルーツをふんだんに使ったというタルトに惹かれて、足はいつのまにか丸御池駅の改札を抜け、地上へと向いていた。

「こんにちは」

少しだけ重い木の扉のアンティークな取っ手を引いて、ひよっこり顔を覗かせる。

顔なじみの店員のお姉さんが、萌に気づいて笑顔で頷いてくれた。タケルを探そうとすると、あっちあっち、とイトインスペースを指さされる。指先につられるようにして顔を向けた萌の視界に飛び込んできたのは、あの日の赤い傘だった。

――あ……！

TOさんだろうか、姉の麗と同年代に見える背筋のすっとした美しい女性が、花がほころぶように萌へと微笑みかけてくる。

「ほらほら萌ちゃん、ぼうっとしてないで座りや」

入り口に背中を向ける形でOさんの正面に座っていたタケルが、椅子の背もたれに手を

かけるようにして振り向いた。

「私、どうしてもお礼を言いたかったんです。親切なお嬢さんに」

「ええ、僕も。だって、僕から彼女へのプレゼントだったんですから」

女性の隣りには、スーツを隙なく着こなした男性が寄り添っていた。

「この人、出張で海外に行ってたんやけど、新型コロナウイルスの関係ですと足止めされてて、帰国出来ひんかったの。それがあの日、帰ってこられるって話になってね、嬉しくって思わず電波のいい地上に飛び出してしまったのよ」

うっすら頬を染める女性は、確かに大人であるのに、どこか少女めいていた。

「—そうやったんや。プレゼントだったから、あんなに大事に大事にしてたんやね。大好きな人からの贈り物やもの、大切に使うよね。特別な傘になるよね。」

大切にしている傘よりも更に大事な人に逢える喜びに沸き立ったなら、忘れ物にも領ける。

思わず笑顔になった萌を見て、並ぶ二人もにっこりと顔を見合わせた。

今も赤い傘を携えたままの婚約者を、優しい眼差しで見やる男性に、萌は胸いっぱい幸福を貰った気がした。

「—ええなあ。わたしにもそんな男の人、現れへんかなあ。」

ふと思いついて隣のタケルを眺めやれば、

「ん？ 萌ちゃん、おなか減ったん？」

ほおばったパンでいっぱい口をもごもご動かしながら、そう問いかけてきたので、

「ないない。色気より食い気やもん。ああ、わたしの春はまだ遠いみたいやなあ……」

そう呟いて、幸せそうな三人の微笑みを受けながら、萌はタケルと同じようにぱくりとケーキに噛みついた。

美味しいケーキからは、甘酸っぱい南国のフルーツの風味と—やっぱり幸福の味がした。

【佳作】

タイトル「萌の思索―社会に出るとは―」
作者…さこんどの

「ねえ。『社会に出る』ってどういう事なのかな？」

と、突然つぶやいた太秦萌に、松賀咲と小野ミサが面食らった様子で反応した。

「ん、急にどうかしたんか萌？」

「誰かに何か言われたの？」

「うちの学校に一人ちょっと厳しい先生がいてね、忘れ物とか課題提出が遅れた時とか『そんなことでは社会に出たら通用しないよ』って叱るのが口癖なの。もちろん約束を守るのは当然だと思うんだけど、『社会に出る』って改めてどういう事なのか気になってね」

「そうやなあ、就職したら『社会人になる』ってイメージかなあ」

「私の好きなアニメで『大人は誰でもつらいから、お酒を飲んでもいい事になっている』って確か言ってたと思うけど、『大人になる』っていうのとは違うのかなあ？」

「まだ高校生のうちにもうそんな事考えるなんて萌はすごいなあ！でも萌、お姉さんに聞いてみるのが一番いいんじゃないか？」

「私もそう思うけど、それちょっと恥ずかしいよね。私もお兄ちゃんにはそういう事聞きにくいと思う」

(うーん、お姉ちゃんの事はすごいと思ってるけど、やっぱり何か照れ臭いなあ……。)

数日後の夕刻、帰宅途中の萌は珍しい人に遭遇した。ミサの兄小野陵の親友にしてパン職員見習いの十条タケル。親族以外では萌にとって最も身近な「働く大人」の一人である。

「あれっ、タケルさん、仕事帰りですか？」

「おお萌ちゃんか。こんな所で会うなんて奇遇やな、元気してたか？」

「おかげさまで・そうだタケルさん、ちょっとお話したいんですけど時間いいですか？」

「タケルさんはもう社会に出て働いているわけですけど『社会に出る』ってどういう感じなんでしょうか？」

「確かに俺は働いてるけど、正直そういう事は考えた事ないなあ。働く＝『社会に出る』ってわけでもないやろうし。大学生と言っても陵の方がしっかりしとるから、あいつの方が『社会に出ている』感はあるかなあと思うよ。」

もう少し深く聞きたそうな萌の思いを察したタケルはさらに続けた。

「まあ『社会人と学生の違い』ならはつきりしとるかな。学校のテストだと平均点以上なら優秀扱いだけど、社会人は基本的に「百点が当たり前」で失敗は許されへんからね。後はその結果を継続する必要もある。『社会に出ると求められる』のはこういう事かもしれないね。」

「うわあ、結構厳しいかも……。でもすっごく参考になりました！ありがとうございます」

ケルさん。」

「俺も全然まだまだなのに、偉そうな事言ってる悪いな。それよりも、萌ちゃんのお姉さんは俺から見てもすごくカッコいいし、俺なんかより一回聞いてみたらどうなんかな？」

（タケルさんも咲やミサと同じ事言ってる。ここは思い切ってお姉ちゃんに聞いてみるかな？）

コトキン・ライナーの金曜日だが珍しく早い帰宅の太秦麗。今日は自作の漬物のつかり具合を確かめながらゆっくり一人で晩酌のつもりである。

「あつ、お姉ちゃん今日家でお酒なんだ。私がお酌してあげよっか？」

「んー、何かな萌、お姉ちゃんにお小遣いをおねだりだった今日はダメだよ？」

「そんなんじゃないって、たまにはお姉ちゃんと真面目な話とかしてみたいなあと思って。さあさあどうぞ。」

「じゃあ喜んで。で、どうしたの？何か悩みでもあるの？もしかして恋バナ？」

「はは、そんなんじゃないんだけど、その……『社会に出る』ってどういう事なのかなあと思ってる……。」

これまでの経緯を萌から聞いた麗は思わず感嘆の声を上げた。

「萌は偉いね。私も同じように悩んだ事はあったけど、それは大学に入ってからやったし、高校生の時点でそう考えられるってすごいと思うよ。さすが私の妹はかわいいだけじゃないねー！」

もう酔ってかかっているのか、と見返した萌の眼に映る姉は、穏やかにほほ笑みつつもその眼は真剣そのものだった。

「咲ちゃんもミサちゃんも、タケル君の言う事も全部正しいと思う。その上で私が確実に言えるのは『実際に社会に出てみないと分からない』という事かな。こんな答えでがっかりした？」

「ううん、そんな事ない。こういうのって正解はない事はよく分かるし。」

「誰でもいつかは社会へ出る事になるけど、その前の学生の時でしかできない事に全力で打ち込んだ事が、その後の社会に出た時にすごく役に立つのは間違いないよ。今の萌は、まづ今を全力で過ごしたらいいんじゃないかな？」

「そっか、ありがとうお姉ちゃん。ちよつと恥ずかしかったけど思い切って話してみても良かった。」

「それはよかった。まあね、社会に出た後は辛い事も結構あるけど、だから大人はお酒を飲んでもいいんだよ。早く賢い妹と一緒に飲みたいねえ、さあ萌、お酌お酌！」

（あはは、ミサと同じ事言ってる！）

心なしか嬉しそうに見える姉にせつせとお酌しつつ、こんな素敵な見本が身近にいてくれる自分は幸せだと改めて思う萌だった。

作品タイトル「うるわしのみやこ」
作者…まき・ろうえる

今日も終電。

赤いランプの行き先掲示がまったりしている路線バスを仕事場の窓から下に見下ろしもう一踏ん張り、と気がつけば今日も地下鉄は最後。

多いのか少ないのか、思いのほか混んでいる車内は、今日も当然静か。以前の賑わい？が少し恋しくもあり。

やっぱり無観客でいいので一山曳いて欲しかった。なんとなくそう思いつつ揺られる車内。でも、よく我慢した、私！今日もどこにも寄らずにまっすぐ帰宅。

うちではいとしの家族とささやかな夕餉をとって、あ、やっぱり晩酌。明日は在宅勤務で朝に余裕があるから。

などと考えつつ揺れる吊り広告を見るとはなしに見て、最新の市の情報にアクセス。うんうん、なるほど市政は、とひとりほくそ笑む。

「こんばんは、今日も遅いしなんか困るけど、まあいいか」

「はい？ ええっと…」

東西線の少し狭い車内の若干うるさい走行音の中、その声は確かに聞こえた。

でも、その声の方向には窓、恐る恐る後ろや左右見回してもみんな静かのマスクとスマホ。いやまさか窓の外からなんて、と振り返ると映るのは。

「一日がんばって素敵に疲れた私…」

「いやいや素敵に疲れた私ってなに！」

でもまあ想像はつく、寝てる、夢。窓に映った私が私に話してる。せつかくだから少し付き合う。

「おつかれ」

「はい、お疲れ様でした。ありがとうございます、今日も一日頑張ってくれて」

「それを言う？ 自分に」

「そう、言う。疲れたのなら無理せず休んでも大丈夫、その影響で世界は回らないわけではないんだから」

そう言った窓の向こうの私は、あろうことかいきなり上着脱ぎ出しパジャマに着替え出す。いやいや、夢とは言え、え、もしやこっちの自分も？

慌てて身だしなみを確認する私に、あちらの自分はマイペースに、あくびひとつ。

「大丈夫、終電だから折り返さない。もつと寝ててもいいんだよ」

「え？」

「おはようございます、お父さん」

見上げるとそこにはかなりいい感じに出来上がった麗の姿。

「いやいやそこはこんばんはだろ、終電だし」

「寝てたひと起こす挨拶は、おはようでしょ？」

「酔っ払いに言われたくないなあ」

「お互い様か」

そう笑い合う口元にもさわやかにたゆたう風は、改札を抜けた帰路の川沿いに吹く。もはや夏を忘れて涼やかになった初秋のある日。

「あ、今度Yが最適な護摩木炊く会があるんだって、これですますます世界は回って素敵！」

「いやほんと麗、酔ってるな」

終わり

作品タイトル「秋に萌える園」

作者…まき・ろうえる

「ほら、もつとぐるぐるするの！」

「えー？ う、腕がもうばんばん」

と、秋にしては眩しい陽光の映えるコスモス畑のあぜ道で、萌に声をかけるのはその。さらには真つ白タオルをひたすら振りまわす萌に、そのは至って真面目にこう返した。

「ほらきた、きたよ！ アサギマダラ！ あ、これはオスカナー？」

「うわ、ほんとにきた。でもこれって、たまたまでしょ」

と、タオル振り回す手を止める萌。

すると、せつかく訪れたアサギマダラの彼？はふわりと風に乗って去っていく。

「だめ！ もつと頑張つて、若いんだからやれる。いつものカメラはもつと重いんでしょ？」

「いや、カメラは脇に構えてホルドするので実はそれほど腕の力があるわけでは・・・」
などとひとり愚痴つつへばる萌を尻目に、そのはとつとと駆け出して右手に白タオル回しつつ、左手に虫取り網を振るう。

「よーし、採れた。見て、これがアサギマダラです！ どうだー！？ 撮れる？」

「うわ、綺麗、羽根にこんなに鮮やかな薄青？」

「この色がまさにあさぎ色なの。半透明なのが綺麗、で・・・」

虫取り網越しのアサギマダラとの初の対面、腕がつりそうなのも忘れて萌はカメラを構える。

でもってマイペースにそのは、

「これは、うんやつぱりオス。でもってメスも見せたいからさあ！ タオルを回すの！ 萌ちゃんならできる！ いや、今やらないでいつやるの！」

そう、これは軽い気持ちで萌がいとこのそのの研究テーマ、アサギマダラを撮りたい。などと話した翌日の出来事です。

若干そののテンションに引き気味な萌です・・・。

さて、少し時間は遡り。

その曰く、

「白いタオルを振り回すとアサギマダラは寄ってくる。できればフジバカマ畑でやりたかったけど」

の言のとおり、可憐な蝶はやってきた。なお、アサギマダラはフジバカマ好きなもの、その説明から知った萌。

ただ、萌としてはやってきた蝶達を周りにふわふわ舞わせ、コスモス畑でふんわりほのぼの、ちよつとファンタジックないとこの姿を撮りたかったのです。

ええ、ちゃんと注文通りそのはふんわりした薄緑のワンピースで秋のコスモス畑にご降臨。まだ日差し厳しいので幅広麦わら帽子はいい。

としても、その手の虫取り網、ついでに虫取りかご。なのはいかがでしょうか？

「小学生か!？」

とのツツコミはグツと喉の奥で抑え、萌はあいまいな笑みで今を迎えています。

そのは慎重に虫取り網からとりだしたアサギマダラを虫取りかごへ。そして、ためつすがめつ観察しています。

「えっと、写真撮っても？」

「うーん、ちよつと待って、どうせなら飛んでるところとかコスモスにとまってるってところの方がいいしょ？ だからもつと集めて！ 捕まえるのは私がするから！」

「ええつと、それは願ったり叶ったりですけど、やつぱりタオルをぐるぐる？」

「当然！ 萌ちゃんはできる。むしろ今だからこそ！」

「うわぁ・・・」

「あ、マーキングあり。これは記録して報告だ」

「なに？」

見ると蝶の羽根の外側に何やら記号？ いや文字が書かれている。

「アサギマダラの移動を研究者のネットワークで共有しているから、その印。いいよねえ、自分だけでなく、日本中、いや世界中に仲間がいることが実感できるし」

「へえ、これは撮らねば、こういうのもまた、いい」

「わかるう？ いいよねえ」

と、新たな知識に触れる楽しみとともに、遠く静原の午後は過ぎていきました。

「でも静原は遠いね」

「む、地下鉄で北大路出てバス乗るだけでしょ？ そもそも萌ちゃんがフジバカマもコスモスも豊富な植物園はマンネリでいや、なんて言い出すからこっちにしたいのに」

終わり

作品タイトル「見ゆるセカイは遠くて近い」
作者…まき・ろうえる

この先に見える街はどこ。

トンネル？を抜けるとそこは竹田駅。京都の地下鉄では唯一の地上駅だ。

「地下鉄なのに街が、空が見える駅。地下鉄車両が外にあるレア感が何故かの背徳感をも感じさせ、私の心の琴線を密やかに奏でるのです」

と、ミサの独り言。いや、そうではない。イマジナリーフレンドである人工精霊の都くんが浮かぶ視線の高さにそう言い聞かせていて。

「はあ、もうなんでミサはそういう変なことをいうのですかね」

「いやあちよつと久々に明るい世界に出たもので、その興奮を隠しきれないのですよ。むふふ、なんていうのかな。世界は浄化された！ そんな叫びが高らかなラッパの音と共に聞こえている。そう、アポカリプティックサウンドもかくあるやという感じで」

「いや、それは世界の終わる音ですよ、縁起でもない」

妙に興奮状態のミサに対し、腕くんで困り顔な都くんは、地下鉄が精霊化された存在としてミサに定義された存在。

ただ、もうそんな人工精霊とかは関係なく、ミサが居る世界には彼の存在は別個の人格としてあるわけで、だからこそミサは都くんに必死の抗弁。

「なに言ってるの？ まさかこの生あるうちに世界が終滅を迎えるかのような出来事があるって、それを克服してまた一段階レベルを進めた我らが京都、そして日本、いやさ世界。これを覆せるものなんてもはやない！」

「うはあ、また大きく出ましたね。でも、それはそれとして、ミサはこれからどこへ？」

「え、この清浄な大気を思う存分吸いに来たのですよ、都くん。だからこの竹田駅ホームが目標地点。安全に保たれた地下鉄システム、そして都くんの適切なナビゲートにより私をここまで運んでくれたんでしょ？ ありがとう」

アンダーリムをなおしつつ目をパチクリさせるミサの素直な笑顔に、都くんも照れたようにほんわかライトを点灯させます。

「地下鉄の精霊である私にとっては嬉しい言葉ではありません。でも、そんな私が言うのもなんですが、改札を出て付近を散策くらいしてみても良いのでは？」

「ああ、じゃあちよつと行こうか。どこがおすすすめ？」

「はい、やはり竹田と言えば・・・」

今日もまた、ミサは都くんとの小旅行。行く先の街はどこだって新しい発見と驚きに満ちている。

なにもかも解決した完璧な世界が、そこにはある。

ミサと都くんだけの世界はこれからも、続く。

「つて、気持ちよくなっているところ、失礼ながらミサ」

「はい？ 都くんまだ意見が？」

「いまはそういう破滅的未來ではないのです。私は京都の地下鉄を案内するために生み出された都くん。もっと細かくいうとミサのホログラムスマートフォンにインストールされた地下鉄バス案内から始まり、今や京都の隅々まで網羅しているナビゲートAIです。ミサの語る全ては完璧に理解し応答できるまでに進化していますが、そんなディスプレイな世界じゃないので、そろそろそのお話はちよつと置きましょう」

「ええ！？ 私の語り到此までついてくる人はお兄ちゃんくらいなのだから、もうちよつと乗っかって欲しいなあ」

少しだけの未来、そんな幸せな休日の午後。

ミサの周りに行き交う人々の前にもまた、多くの都くんや京ちゃんと笑顔に会話しています。

終わり

作品タイトル「猛るほむらの行き先は」
作者…まき・ろうえる

烏丸御池駅へ続く階段、何駅分か走ってきた咲は、ふうと息を吐いてマスクをする。その眼前には記憶に新しい特異な髪型を発見する。

「あ、ミュさんじゃないですか。今日は定時ですか？」

「むう、それだといいですけどね。この身軽な様見てわからない？ 今日、いやさ今日も残業だ！」

と、手に持つ荷物は財布だけのミュが口調の割にはにこやかな笑顔で応対する。

とは言え、笑顔のそれは目元だけ。

「なんですか、嬉しそう。仕事中毒？」

「言うねえ、でもそうじゃない。ちよつと今日は夢中になってただけ」

ミュは駅近所の漫画ミュージアムから出てきたところ。咲もこの間利用した時に、この特徴的なミュのヘアスタイルについて見とれて、結果的にかなり親しみを抱く関係になっていた。

思い返すと、その髪型に目を奪われていた咲に話しかけてきたのはミュだった。

「どう？ つかみはバッチリ、実はこのミュージアム内のある作品からインスピレーションを得て創作したアレンジなのよ。なお、江戸時代の子供の髪型からではない」

「えええ！？ なんていうかさそんな個性的な髪型ってあるんですか？」

「それがある。ヒントはろうそくのような髪型の壊し人ジョン、って作品名言ってしまった。なお、100mを1秒フラット・・・いやこれは超光速ジェシーだったかな？」

「なんだか適当に言われている感が・・・」

「さあ探せ。結構古めの年代です！」

と煽られ探して見つけた作品の主人公の髪型はかなり違った。ろうそくと言うよりも燃えさかる炎のようなそれだった。

・・・などという展開。

その後、漫画ミュージアムに足繁く通うようにもなっていたものの、このところの外出自粛もあつてご無沙汰だったふたり。

「あれ、ミュージアムでは見かけなかったけど、最寄り駅じゃないよね」

「ええ、時短で部活も少なめなので、自主練です。ここまで走ってきた！」

と笑う咲は汗もなし。クールダウンといったところ。

「元氣だねえ、ま、せっかくだしお茶でもしてこう。パン屋さんに買いに行くところだったし。だいてやるよ」

「えー!？」

驚く咲の様子をにんまり笑うミュ。またしても目元だけが見えない口元のにんまり度は最上級だろう。

「by とやま弁。おっつてあげるって意味」

「もう、ひどいなあ。でも、ありがとうございます!」

こう言った感じで博識というか無駄に広範囲に知識詳しいところで意気揚々なのがミュ。全ては漫画が教えてくれた、などと嘯くのもいつものこと。

ただあくまでコミュニケーションのとっかかりで使って極力嫌みにならないような調整する彼女。咲とは妙に馬が合うのかこんな調子で絶好調。

「ところで残業ってなんですか? バイトの残業?」

「まさか、じぶんの研究のため。ほら、以前漫画ミュージアムでお化けや妖怪作品の展示があった時。目玉展示で件(クダン)の剥製があったでしょ?」

「ああ、ええっと予言する人面の牛」

「そう、だからこんど学校のお祭りで今こそ話題のアマビエの剥製を準備できないかと研究中」

ベースは鯉か鮭か、はたまたピラルクあたりか、などと怪しいこと言い出すミュは改札で何やら話し札をもらって駅改札内へ。

こつも通りPiTaPaが入った咲はその不思議な所作の方が気になった。

「どういうことですか? まさかの顔パス?」

「そんなことない。短時間の改札内利用なら有人改札でそれ用の券をもらって出る時返すことで利用できるのです。ほら、つと言うか入っちゃったので見づらいけど、中のお店利用に関しての案内が貼ってあったでしょ」

「なるほど。なんでも知ってますね」

「そっかなあまだまだ全然。それよりもなに食べる?」

「あ、じゃあがつつり肉系のものを」

「よーし、それなら私も同じものを」

「やりますねえ」

「やるよお、やりますよお」

などとのたまい、またまた破顔するミュに咲も満面の笑み。

その後、たつぷりアマビユから始まりアマビエ、その後ヨゲンノトリやら果てはケツアルコアトルまで出てくる濃厚なミュの話が始まったのでした。

終わり

作品タイトル「今日もサクヤコノハナ」
作者…まき・ろうえる

「あれ？」

ふと、棚の新作パンから目を上げたみやびの大きなグラス越しには元気な男の子。いつも通りのお休みのパン屋さん巡りは今日も順調。食べ歩くとあつという間に体重がヤバイことになるので基本は持ち帰り、吟味してそのお店の中でも特徴的な一品を購入するみやびです。

で、そこで何故か今日は行く先々のパン屋さんのカフェスペースで、出来立てパンを美味しそうに食べている彼がいたのです。いやいや違う、今日もまた彼に会う、です。そう、見かけてこちらがパンを吟味しているといつの間にか消えている。でもってここが重要、そのお店のパンではいい感じに「当たり」があるのです。

いつしか彼のことをみやびはパンの精霊と呼んで愛でていました。

「うん、今日も会った」

心のうちでガッツポーズして、いざパンの陳列棚へ。

みやびの視界の端、精霊さんは申し訳ていどにお冷やを舐め、満足げにメモを取ると、とつととお店を去っていきます。

「それにしても今日は妙に精霊さんに会う」

店出たあとの彼の行き先を見るとはなしに目の端で追いつつ、ひとり呟くみやび。

早速精霊効果かその店での新作パンを購入し、次の店を誘なうスマホの地図アプリを確認。パン屋で検索したメーカーをチェックする。

「ああ、そっか。同じアプリ使ってるなら最短コースで重なりますね」

あつさり美味しいパンを誘なう精霊さんの謎が解けた。

気をよくみやびはスマホをしまい、次なるお店へ。

次のお店は持ち帰りのみのボリュームミーなサンド中心のお店。

量はあつてそれなりのお値段ですが、美味しいし新作豊富。かつ、お昼過ぎた・・・というかもうおやつとの時間に近い今、昼営業終了間際で割引にも期待できる。ただ今日はその精霊さんの彼が買い占めないかが気がかりですが。

当然、そのサンドウィッチ専門店には「彼も降臨している。というかこちらが到着するところでもう旅立とうとしています、カフェスペースがないのだから。

彼はタンホールチキンがまるまる挟まれた、およそサンドウィッチというには丸すぎる、チキンに薄切り食パンが貼りついたそれをもしましや食べつつみやびとすれ違えます。

「あ、新作だ」

行儀悪、という思いよりつい漏らしたみやびの声に、一瞬彼はお口のもぐもぐが止まって、目だけでチラッと笑ってマスクを直し、去っていく。

まさか精霊さんもこつちを把握してた？ まあ、そりやそうか。と、心で嘆息しみやびはお店に入ります。

「・・・あつた。ラッキー」

あの目はそういう意味だったか、みやびが買ったのはまさにお昼営業最後のひとつ、新作タンドールチキンとレタスのサンドの30%引き。なお、レタスは両サイドに「枚ずつチキンとパンの間に。」

「さて、もうこんな時間だし。帰るかな」

歩む先は地下鉄の入り口へ。今日は気がつけば最寄りの駅は二条城前。先ほどは烏丸御池、その前は四条だったから結構な距離を歩いてきた。

「精霊さんに連れてこられたのかあ」

何気にお大食いで食べ続けている精霊さんの彼とは違い、こつちはお昼抜きで全然食べてない。そんなところにさらに堀川通東の入り口から長い地下道を進み、ようやく改札に到着。息が上がってくると貼りつくマスクが鬱陶しい。

「けど、まあいい感じの負荷と思えば」

あくまでポジティブに考え、みやびはホームへ。

果たしてそこに彼はいた。そう予感はしていたみやび。しかし、気づく。

「え？」

かろうじて、その後の言葉「そのお店は知らない」は飲み込んだみやび。

恐ろしいことに彼はまたしても別のパン屋の紙袋を手にしています。さすがにもうもぐもぐってはいないものの。

どうする、地図アプリでは表示がまだない新店に違いない。同じ道筋だからそんなに遠くない、時間も時間だし昼営業時間が終わっているかも。いや、そもそもそのパン屋が、作られたパンがどんなだか知りたい。

意を決してみやびは、かのパンの精霊に話しかけた。

「はじめまして、いや、若干そうでもないかもです。で、不躰ですが、そのパン屋さんはどこですか？」

「ああ、どうも？ ！」

一瞬の怪訝な顔はすぐに払拭。

「いつもお見かけしております。今日もいいのがあつてよかったですよね。で、このパン屋さんですけど、二条城のちょっと上がったところに酒屋さんがあつて、そこから・・・」

もたらされた精霊さん情報に満面の笑みとお礼で答え、ついでにさっき買ったパンからお
気に入りの一つを彼にお供えし、みやびはまた外へ。
明日の筋肉痛を覚悟して、歩むみやびでした。

終わり

作品タイトル「我向かう 密められたし 緑翠の宴(われむかう ひそめられたし) りよくすいのえん)」
作者…まき・ろうえる

地下鉄の駅からショッピングセンターを後ろに川を渡り、大学の前を少し進む先にあるのはモザイク模様細かく分割された区画に色とりどりの作物。「おお、なんていうか、壮観!」 「それでしょ、まさに秘密の花園」 マスクを外しつつ麗がもらす言葉に京香は若干胸をそらせて自慢げだ。都会の真ん中だというのに、なぜかポツカリ空いた空間に巨大な貸し農園群。花園というには緑碧の世界ですが。

「さて、うちの畑はこのうち、どこでしょうか?」 「まーたむちやな質問を・・・」 でもそういう麗は目ざとくひとつの区画を指差した。そこには、ほかの区画と同様に小さな作業用具を収める小屋がある。ただ、その様が、違う。一般的なトタン屋根のこじんまりとしたものとは違い、まさに家。それもヨーロッパ建築の木組みの家。それが小屋サイズにミニチュア化されている。小屋の周りは小さく花も咲いている。「あれ、あの赤茶けた屋根に乳白色の壁に木組みの窓枠が印象的、というか明らかに場違いなミニチュアのあるところ」 「はい、正解です。では早速行ってみよう」

足取り軽く進む京香に、麗は小走りになって追う。「今日は麗が好きな野菜をとって漬けてもらいます」などと京香に言われてほいほいついてきた麗ですが、もうひとつの意味にも気づく。「なるほど、この木組みの家風小屋を自慢するのもあったんだ」 「あ、わかるう?」 笑顔に振り向く京香、これもまた世界巡った買い付けの際に目をつけたものなのだろう。「で、この小屋はどう開くの?」 「それは前面がガバツと開きます。これはこどもに大人気になるはず!・・・」 と、果たしてそこには、まさかミニチュアな家の内部が!・・・って、今は動物なぬいぐるみがいだけか」 「まあ、元はそうだった作りで、本格的に遊べただけだねえ、ちよつと大きすぎた」 苦笑の京香、たしかにほかの畑の小屋と同様に大人が立ったまま入れる高さ。これだとこどもが遊ぶには上の階の住人たちはずつと寝たままにするしかないだろう。「で、中身は外して農機具小屋です。この子はマスコット」 ちよんと突かれたぬいぐるみはこの小屋の元々の住人、今は守護神?

「で、麗にはこの長靴と軍手、私がそこをスコップで土起こしするので、三つ鍬でその塊を砕いていい感じにほぐしてきて」 「はいはい、っていきなりテクニカルね。初心者私にはスコップの方がいいかも」 「いいの? しんどいよ」とスコップ差し出しつつ京香の心配顔。あ、これはほんとにしんどそうだと気づいた麗はその手をさつと引っ込め、神妙にうなづく。「うん、わかった。京香の指示に従います」 そう返された京香も真剣にうなづく、互いにフェースシルドつけつつ笑う。なお、これはもともと草刈り用に京香が持っていたもの。今回も土くれの飛び散りを防ぐ本来の役目だ。「さあちやっちゃとやっちゃおう」

一仕事終わり、木組みの家ミニチュアな小屋に戻って水筒から冷やしたほうじ茶。そのお茶に小首傾げつつ麗は問う。「麦茶じゃないところが、こだわり？」「香ばしいところは変わらないし、麦茶よりも、お茶のもちがいいかなあ」「そうなんだ。なんにせよおいしい！」そうやって互いに笑みを交換した後、京香はいそいそと取り出す花束、いや草の束。「はい、プレゼント、何も言わずに受け取ってほしい」と、妙にカッコつける京香。「うわー、ありがと。で、これは・・・モロヘイヤ。と？」「つるむらさき。どうぞお納めください」「うん、これはまたぬめっとしてて、漬けがいきなりそう！」渡された緑の野菜たちに、麗はさらっといつもどおりに漬物レシピへと夢馳せる。「え、これはおひたしとか炒め物がいいんじゃないの？」「それがね、浅漬けでいい感じにできるのです。しかも、お肌によさげな仕上がりになる」「ほほう、これは出来立てをいただきたいですね」顔を近づけてこっそり微笑む京香。ただしフェースシールド越し。いやだからこそ麗も妙にこっそり近づいて微笑む。「じゃ、帰ってささっと作ってみましょうかねえ」ウキウキと帰り支度始める麗でしたが、京香がポツリと。「ところで、畑には食べごろのきゅうりやなすびがあるので、さうです。そもそもがその目的でした。「当然、それもいただきます。お漬物祭りでお酒も進みますよ」ということで麗。帰り支度はささっと済ませて地下鉄に乗って出発です。あ、マスクも忘れずささっとつけます。

終わり

作品タイトル「そこはいつか来たところ、向かう場所」
作者…まき・ろうえる

陵はミサの兄である。

今日もまた、妹は妙な絡みを發揮してきた。

曰く、

「美術館は地下から入る様がまさに魔境。黄泉の国へと通ずる口もかくやという扉は重々しく、一見の価値あり」

と。

そう、このところのミサはなんだかんだと動物園、植物園と行った話を聞いたと思ったら、文化博物館や漫画ミュージアム、果ては二条城に上七軒。なんだ急に文化に目覚めたか。

面白い傾向だ。このところはミサも音楽活動やりづらいからな、と思いつつ、彼は地下鉄東山の改札を地下鉄一日券で通過する。

「で、結局こうなのか・・・」

白川沿いを進み、交差点を渡って右手に見渡すと美術館。最近リニューアルしたのは知っていたので、若干ミサの言に期待していた陵である。

地下鉄から地下通路でそのまま地下から入館できるのか、とも期待していた自分の高揚感との折り合いをつけるのに、しばしの時間。

そこは一階の入り口は重厚な扉のままひたすら閉じられ、平安神宮の参道から離れて緩やかなすり鉢状の底に進むと、ミサ言うところの黄泉の口？

ガラス張りの自動ドアと左右に広がるひたすらクリスタルな透明な壁。すり鉢状のスロープも白く輝き地下の入り口どころか、明るく空からの陽光を取り込む大規模なテラリウムの如し。

敢えて言うなら、地上部分の重厚な建造物は天国を内包しているのかとの期待をも抱きたくなる。

「さて、一日券があるとお得、と」

これもまたミサの助言。コレクションルームならこれで割引、なんなら近所の動物園も割引効くので行つとけ、と。というかミサが行っているところがことごとく一日券での優待ありだ。

「え、市内なら結局一緒」

そう、一日券の優待価格は市内在住者価格と同じ。入館予約した時に気づくべきだった。

やられた、元を取るために動物園にも行くか？ いや、無凜庵も割引効くのでここで東山を借景にお茶でもするか。おっと飛び込みは無理だから予約するか。

と、吝嗇家でもないのにやぶさかなことを考えつつ陵はチケットを購入する。

早速入ると大きなエントランス。まだ、ここは地下、窓もないのにこの広々とした静寂たる空間。

入場者もほぼいない様が、まさに異空間。

までも暫くの停滞が必要だった陵である。・・・果たしたため息つくべきか。

いや、彼は高く天井まで見上げて、ミサの意味することがわかった気がした。

「うん、来たかいがあった」

満足げにうなずき、コレクションルームへ向かう陵の瞳はますますの期待に満ちていた。

その後無凜庵にて、ミサとその友達の萌や咲に偶然出会う。

・・・偶然？

「あ、お願いしておみやげの鳥獣戯画か若冲のグッズは？」

ミサのしたり顔に洪面の陵。

「いやいや、その前になんで勢揃いなんだ？」

「でもお兄さんはきつとこっちにくると信じてたので！」

にかつと笑うは咲。

さらに萌、無凜庵オリジナルどら焼き頬張りつつ。

「鳥獣戯画なら高山寺、今度行くなら高雄がいいですよ」

はあ、と嘆息とともにクラフトビール飲んで陵は一言。

「ならミサたちは大原行ってくれ。存外に爽快だったぞ」

などと応えつつ、

「そろそろ鉄道博物館とか、水族館に行きたいな」

ぼそつと呟く。

終わり

作品タイトル「懸けいたる その先にこそ 叶う仰ぐ陽」
作者…まき・ろうえる

「今日も記録更新」

スマートフォンから受け取ったデータをスマホのアプリで確認する咲。

GPS の位置情報、走行距離、その時の速度に歩数、心拍数など至れり尽くせりで表示される情報。グラフ表示の走行距離に対する速度で、ラストスパートの速度が今日もまた伸びている。

ただ、咲はまだまだ不満げだ。

「とは言え、全然追いつけない」

彼女の目指す先はまだ遠い。仮想のライバルではなく、明確に実在する目標。

このところ部活も時短、自宅付近の自主練で出会った目標こそがその人であった。

毎回というわけではないが週に二回は出会う。その淡々とスティックに走る様はまさに求道者のそれ。プロスポーツ選手か、実業団の長距離ランナーか。

自分のコースと重なる北山駅から松ヶ崎駅までに追いつけるか、いや抜けるかというミッシェン。未だ果たせずにいる咲である。

「次こそは、きつと」

そもそももつと早く出発すればいいと思うものの、ここはラストスパートでまくるのがかっこいい、なぞという思いも捨てがたく、きっちり同じ時刻から走り始めるのが流儀だ。

咲はグツと握り拳で気合を入れてその人が走り去る先を見やるのでした。

その後数日、今日は雨、咲も今日はランニングはやめるかと思いつつ地下鉄で帰る。果たして松ヶ崎の駅から地上へと出ると、蕭蕭と降る雨の中でもランナーの気配。カッパを着てまで走る様はまた、なにかの極みに至ろうとする鬼気迫るものがある。

「おー、まさかと思ったけど。ってそこまでして走るってことはやっばりプロ？」

しかも今日はこちらに向かってくる。そのご尊顔、思い返してみても咲はまだ見た記憶はなかった。

若干のためらいがある彼女、そう、いつか抜いてから見返すその時にこそ、その顔を見る。だから今は見てはいけないのだ、と。

「だけど、これは不可抗力、見とこ」

好奇心には抗えず、咲は何気ない様でそちらを見やる。

すると、不思議な光景がそこにあった。

雨で、しかもカッパを被つての顔面はしとどに濡れるままでよく見えない。それでも真っ直

ぐ進む先を見つめているのはわかる。

その真摯な瞳の先、咲も抗い難い衝動のままその方向を見る。

そこにはただただ雨にけぶる街並み。と、その瞬間、輝く街並みに変貌を遂げる。西から上がり始めた雨、雲間の夕陽がまたこちらに降る雨にオレンジの彩りを添え、一瞬にして逢魔が時、異境の様へと。

まさかそれを、その現象が行われる様を知っていたのかと咲が驚愕のまま振り向くには、遅すぎた。

一迅の風が吹き抜けたと思う間もなく過ぎ去りしその背中。

「ああ、もお。すっかり顔を見られなかった」

雨に濡れるに構わず咲は駅の地上出口の屋根から歩道へ出て嘆く、でもその雨を自分も知って共感したかったのもあった。

「というところで、やっぱり次こそは追いつき追い越し、そして勝つ」

改めてしっかりと自分にターゲットを定めさせ、そのままとりあえずうちまでのラストスパートの咲は足取りも軽やかだった。

その後、咲は高校の避難訓練の講評で登壇するその顔その体型に、どこかで見たことあるようなど、首を傾げる。

しかもその消防隊員は、咲と目が合うと意味深に微笑んだ。

ますます思案にくれる咲がその答えを見つけるまでにはもうちょっと、走り込みの時間が必要なのです。

終わり。

作品タイトル「謎解きうまし家中スイーツ」
作者…まき・ろうえる

このところ、プライベートでのうどんも控えめ。外食で新たな出汁の具合を探すのにも飽きた・・・わけでなく、仕事に影響を与える可能性があるため。とは言え、それはどの職業人も一緒か。外食するにも気をつかう日々。

「では、いただきます」

手を合わせて彼女が眼前にするのは、うどんではない。今日は甘味。

仕事帰りに地下鉄の駅中で発見したお持ち帰りの素敵なもの。

そしていただくスイーツは、その名もうどんスイーツ。揚げたりドーナツになっていたりというのはまだ聞くのですが、まさかのあおり文句が、

「出汁が決め手！」

そう、このうどんデザートの説明には、そのように書かれている。だから、彼女も黙ってはられない。

「昆布だとか、カツオだしはもういいので、レアな出汁だといいな。でもうどんの出汁だとすると・・・」

恐る恐るの加減でそのスイーツ上辺を取る。一見モンブラン、でもその螺旋はうどん。そんな見た目のスイーツだったものの、アラザンかかる天辺にはさくつとスプーンが挿さる。うどんの見た目だけで、クリーム素材のようである。

「小麦由来は土台のパフくらいかな、でもこれですます出汁の想像がつかない。でも、ここは敢えてのカンピョウだしとかかも？」

もうわくわくを隠せない彼女は、いそいそとスプーンの上にある頂上を口に送った。が、妙な顔。

「うーん」

生クリームだ、純然まごうかたなき生なクリームだと自らの舌は訴えかける。そこに何かの出汁も確かにある。

だが、その信頼に足りうる自分の味覚に違和感を感じるほかない。もうひとつ、微かな別の香りが鼻腔をくすぐっているのだ。

「これはあれですね、美味しい。美味しいのにその味が謎」

「ああ、始まった・・・」

斜め前に陣取り、同じくうどんスイーツ類張る弟は、顔を押しさえる。

「だって、これは私の未知の味。こんなの初めて。だけど」

と、ひと呼吸、

「これはうどんだから！」

「はい？」

ますます混乱する弟。だから嫌だったんだという思いはぐっと飲み込み、食べかけていたスープンをソーサーに置き、お冷やを一口。

「だからつまり、結局わかる、と？」

「いやいやいや、待って。いずれわかる。わかるのはうどんだからで……」

「？」

「つまり、出汁でうどんなのだからわからないわけがない。そこを勘案すると、葵はきつとわかることになる、つまりだから私もわかるはず」

にんまり、どや顔見せる彼女は妹の名前を挙げて妙な自信だ。

なんだか妙な展開に一緒にスイーツ食べる葵の弟は苦笑い。

「わかった、ならまあもつと食べて。ちい姉ちゃんじゃないんだし、一口で答え出す必要ないし」

「むう、そう言われるのがヤなんですけど」

と、渋々のいで姉はスプーンを再開。

「ああ、でもとにかく美味しい！」

至福の笑みとはこれのことかという笑み。これが見るものまでも幸せにするので今度は逆に釣られていい笑みのまま弟は言うよう。

「ほんと、これはキワモノかと思いきやのサプライズ。なんで貝の出汁がここまで生クリームの合うのか」

そう、なにげに葵の家族である姉弟だからこそ、みな出汁にうるさい。そもそもうどん巡りで一緒に讃岐ツアーまでしたものだ。

「あー、もうここまで出かかっていたのにー！」

天を仰ぎひととき嘆いた後、姉はけろりとして続けた。

「ホタテ、もう先に答え出すなら種類まで言っつてよ」

「はあ、そこまでわかるんならとつと答えないとおお姉ちゃんが悪い」

「でもね、もうひとつ見つけた。それがようやくわかったのですよ」

おお姉、つまり一番上の彼女のペースはもう戻っていた。ぱくぱく進んだシャーベットスプーンを休め、口唇に挟んで上下に揺らす。

「行儀が悪いなあ」

何故か弟はそんな口調なのに、嬉しげに目を細める。そう、これは彼の二人の姉のお揃いのくせ。

この姉のように、葵もまたこれを食べればきつと同じ展開になるんじゃないか、そう思いつつ、二人してにんまり笑みを交換した。

さて、いよいよ帰宅の葵、出汁に確かな自信を持つその口です。

「銀の粒、アラザンの砂糖に炒り粉だしが入っている。と言うことでホタテとのダブル海鮮だし。でもこのアラザンがどうやって作られたのが謎だし、悩むだし」

という弁。
この韻はなんだ。と一瞬真顔の姉弟。とは言え、もうひとつの出汁の存在に驚き隠せない。ただ、全く悩むようなそぶりではなく、葵はまさに名前の意味、明ける陽の如くな笑みを咲かせて、続けます。

「実は私も帰りの駅中で見つけたよいものがあるのだけれど」

また皆で謎と感動をわかち合う、家中スイーツなのです。

終わり。

作品タイトル「VRでもっと地下鉄に乗るっ！」
作者：まき・ろうえる

「その飯盒のようなものはなにかな？」
疑問形、だがあきらかにうきうき顔の麗は妹の萌の持つそれに興味津々だ。

「もう、そういうボケは必要ありません。VRゴーグルです」

萌は神妙な顔で取り出していたその飯盒、もといVRゴーグルを姉に差し出す。

「情報の授業でアプリ作ったんだけど、どうかなって？」

「ほほう、今はそんなまでやるの？ え、まあとにかくやってみろ、と。いうねえ」

いそいそとVRゴーグルを身につける麗、さらに萌からゲーム機のコントローラーを渡される。

ピント合わせや視野角調整など、終わったたら唐突に麗は地下鉄車内にいた。

「お、地下鉄がCGで再現されている。すごい、なんか揺れているのもあって動いている感じがする。あ、これは東西線！」

「いい出来でしょ。地味に吊り広告の揺れが最初は板がぶら下がっていたのをここまで自然に・・・」

と、得意げに萌は解説。それを話半分に相槌打ちつつ麗はVRの地下鉄車内の探索に勤しんでいる。

しばらく車内を移動した後、麗はゆったりと訊く。

「ねえ、隣の車両は？」

「う、色々あつて車両が増えると動きがすごいカクカクするのでこの地下鉄は「両編成です」

「うーむ、でもあれよね、誰も乗客いないのもそういうことで・・・え、窓に、窓に！」

そう、麗がふと最後尾から後ろに空いているトンネルを見ると写っていたのは地下鉄マスコットキャラの都くん。自分は都くんとなって地下鉄乗車中だ。

「そうです。都くんなので上下移動も可能」

これまた萌が得意げな声、VRゴーグル外してそんな妹のドヤ顔を見てみたいものの、上下移動できると言われたらしないわけにはいかない姉。

麗がコントローラーアナログスティック上下に動かすと、視点が動く。天井間近から見下ろす車内は新鮮だ。

「ほほう、何気に面白いですな。で、いつ駅に着くの？」

まさか作り込みの関係でひたすら走り続けるだけか、と危惧した麗の言葉に重ねるように

萌。

「大丈夫、駅はあります」

さあゆったりと減速、何か違和感あると思ったら車内アナウンスが全くない、いや走行音もない。そこはまあ仕方ないかと勝手に納得する麗。・・・というかそもそもヘッドホンを着けていないことに今更気づく。

「あ、しかもホームドアもしっかり再現」

いつもの駅での音を勝手に脳内で再生しつつ、麗は駅へと降り立つ。

「ん？ 急に実写」

「これは地下鉄ホームページで公開されている駅構内をビューイングできるもの。これのAPIが公開されているので連携させたの。だから目の高さは変わらないけど、駅構内を探索できる。もうまさにVRサブウェイ」

で、これがまた調整が大変で、と萌は語り続ける。

もちろん麗はそんな妹の言を待たずにずんずんと進み出す。

「あ、ここは山科駅だ、どこまでいけるの？」

「ええっと、改札出てからもどんどん進めるけど」

「そっかじゃあどうしようかな。あ、まだ改装前の地下道だ」

過去の地下道をしばらく堪能し、改装後の木の香りと温もりがあるビューイングも見てみたいものだと思う麗。

「さて、ここは地下鉄に戻って六地藏まで行ってJRに乗り換えるか、川渡って京阪か」

「あ、山科から向こう六地藏方面は無理、ビューイングがない。でもなぜ改札を出ようとするの？」

もう少し自分の作った地下鉄車内部分を堪能して欲しいのか、萌の抗議の声に、麗はまあまあとなだめる口調で返した。

「いやあ地下鉄の改札出てからの地下街が楽しいでしょ？ 市役所前とかも楽しいよ」

「残念ながら市役所前の地下街は撮った時間が営業時間外で入れないはず。改札内で色々ある烏丸御池もあるので、そっちで我慢して」

姉の言い分もわかる。また、それなりにビューイングで歩き回って探検していた萌は即答。

「はいはい」

と、ホームドアへ戻り、次の地下鉄を現実のように後3分か、などと呟きつつ待つ姉の背に、萌は軽く手を当て笑いかける。

「もう、お姉ちゃんは律儀だなあ。ちよっと設定変更で一気に駅移動できるんで、やり方を言おっか？」

「あら、そういうのがあるんだ。現実にもあると嬉しいなあ」

そう返す麗も微笑んで、続ける。

「・・・でも、せっかくの力作だし、もっと地下鉄に乗るっ！」

作品タイトル「萌の四葉のクローバー」
作者…織田はじめ

太秦萌は昨日、両親と高校卒業後の進路を話し合った。萌は芸術系の大学でアニメ技術を学びたいと思っていたが、両親は大学の文系への進学を希望していた。2時間話したが結論は出なかった。母は「萌には光るものがあるから、小さくまとまらずに時間を掛けて磨いて欲しい。萌はそれが出来る子供だから」と言う母の気持が嬉しかった。

その夜、夢の中に3年前に亡くなったお婆ちゃんが現われ「萌に、これあげる」と言って、小さな草をくれた。翌朝、枕元を見ると夢で見た草が置いてあり、よく見るとそれは、幸せをもたらすと言われる四葉のクローバーだった。「これで幸せになって下さい」というお婆ちゃんのお願いと思い嬉しかった。

朝食を急いで食べ、太秦天神川駅に向かった。途中、若い男性を追い越した。もしかして、あれは憧れの津田先輩かも知れないと思ったが、後の祭りだった。津田は萌の2才年上の先輩で、バスケット部の主将で全校生の憧れの的だった。萌も密かに思いを寄せていたが、話したこともなかった。

しかし、今日の津田は、背中を丸めトボトボと歩いていたのが気になった。「先輩に覇気がなかったな」と呟いた。そして偶然、帰りの電車でも津田を見掛け、後を追って思い切つて声を掛けた。「津田先輩、ご無沙汰しています」これに「ああ萌ちゃんか」と返事があり、自分の下の名前を知ってくれていることが嬉しかった。歩きながら話した。

「失礼ですけど。先輩、少し元気がないように思います」萌らしく、あけすけに聞いた。「実は、好きな彼女がいるけど、気付いてもらえなくて落ち込んでいる」と素直に自分の気持ちを伝えた。萌はこれに素早く反応した。

「先輩、これ幸せを呼ぶ四葉のクローバー。この葉っぱの1枚をあげますから元気になって、彼女にアプローチして下さい」と憧れている男の幸せを願って、1枚目を渡した。

「萌ちゃん、ありがとう、頑張ってみる」

津田は満面の笑みを返して早足に走り去った。

この日、津田には素晴らしい出来事が起こった。津田は喫茶店でバイトをしていた。急に雨が降り出し、女性が雨宿りに店に入って来て、目と目が合った。その女性は津田が思いを寄せている女性だった。津田はビビと何かを感じた。雨は更に激しくなり、この女性を地下鉄の二条城駅まで送って行くことにした。一つの傘に2人で入って歩き、色々話をした。駅まで送り、彼女に傘を持たせた。自分は強い雨の中を、太秦天神川駅近くの自宅まで走って帰った。

翌日の朝、萌と駅のホームで逢った。「昨日、良いことがあった」と元氣よく言うので「それは良かったね。それじゃもう1枚あげる」と言って、2枚目の葉っぱを渡した。その日、傘を貸した女性が、傘を返しに店を訪れ、それから交際が始まった。

数日後の朝、津田と萌は同じ電車に乗り合わせ、津田がこれまでの出来事を話した。萌も心が明るくなり、昨日、大学入学判定試験の出来が悪くて、落ち込んでいた気持ちが癒された。そして、明るい津田の顔を見たくて3枚目の葉っぱをあげることにした。

津田は、この3枚目の葉っぱで、彼女が目指している海外留学試験の合格を願うことにした。願が適い彼女は合格し、慌ただしく中国の北京に飛び立った。津田は彼女と将来のことを約束しなかったことを悔やんだ。

それから遠距離交際が始まったが、3カ月後、彼女は急に元氣が無くなり心配になった。そんな時、萌が電車に乗って来た。津田は萌に自分の気持ちを話し、萌は涙ぐみそうになった。「それじゃ最後の葉っぱをあげる」と4枚目の葉っぱを津田に渡した。これを受取った津田は、「萌、きつといい報告が出来る様に頑張る」と宣言した。萌は津田が幸せになつて欲しいと、心の底から思った。

萌から4枚目のクローバーの葉っぱをもらった津田は、北京に飛んで行き、彼女にプロポーズして、2年後に結婚する約束をした。

津田は帰国し、太秦天神川駅の改札で萌を待った。萌の姿を見つけた津田は、思わず「萌、OKもらった」大声で言った。そして今度は萌が「両親がデザイン科への進学を許してくれて合格した」と、一気に喋った。

これを聞いて、改札の駅員さんが「お二人ともおめでとございます」と声を掛けてくれ、二人は満面の笑みを駅員さんに返した。

作品タイトル「京都のお茶を飲む」
作者…鵜澤あきら

松賀咲は、幼馴染の太秦萌の家のお茶の間で、座卓に置かれた目の前の急須と真剣な眼差しでにらめっこをしていた。

今を遡ること30分前・・・

「咲ちゃん、いらしゃい。ゆっくりしよし。あれ？ミサちゃんは？」

萌は、三人がそれぞれ通う高校の通学路が交わる烏丸御池駅で咲と合流し、一緒に家に来るはずだった小野ミサのことを咲に尋ねた。

「え？遅れるってメールが入ってるやろ？」

萌は、慌ててスマホを確認すると咲の言う通りであり、てへっ☆と誤魔化しつつ、しもた！とばかりにぺろっぺろと舌を出した。そして、少し考え事した後、何かを思いついたのだからか、こぶしを手の平にポンと打ったが、咲は不覚にも萌の仕草に胸キュンしていた。

「ほな、咲ちゃん。お茶の間で待っててや。」と萌が台所へ向かい・・・、果たして出てきたのは、お茶缶と茶器一式だった。

「萌？え？これって、いつものおぶう？」

「ううん。お茶。熱々のお番茶とちゃう。宇治茶ブランドを支える京都最大の茶産地、和束町の初茶。画家の次郎おじさんが創作中のリフレッシュに使うとるスペシャルセレクトやで！お茶を飲むと身体の免疫力や集中力が増すし、ええお茶ほどほっこりできんで！」

咲は「和束町ってどこやったっけ？」と一瞬とまどいつつ萌の持ってきた茶器をよく見てみると、見慣れた急須、それと似ているが小柄で取っ手が無い陶器が混じっていた。

そして、湯呑も漬物と日本酒が大好きな萌の姉、麗が所有している御猪口ではないかと思えるほど、とても可愛らしい物であった。

咲は急須でない方の陶器を手を取った。

「なんやこれ。急須やないの？え？宝瓶（ほうびん）って言うんか。かいらしなあ。」

「うん、三人揃ってからと思ったんやけど。ところで、咲ちゃんってお茶は飲むん？」

「そらあ飲むに決まってるやろ？」

「ほな、お家にいる時、自分でお茶を淹れたりしいひんの？」

「大概は家族が淹れてくれるやろ。自分からは・・・ほとんどせえへんなあ。」

咲は知識としてはお茶の淹れ方を知っており、頭の中で「浅蒸しの初茶の一煎目に使うお湯の温度は70度。熱々のお湯を急須・湯呑・湯冷ましを使って温度調整。お茶の浸出時間は1〜1分半、特上の玉露は人肌に近い温度で2分ほど。お茶の水色を見ながら抽出を調整。急須は揺すったらあかん。味が均等になるよう注ぎ分け、最後の一滴まで搾り切る。」と一連の流れを瞬時にイメージする。

しかし、上手に淹れられるのか自信がない。

萌は、そんな咲を知ってか知らずしてか、「咲ちゃんの淹れたお茶が飲みたくないなあ。」と。パアツと眩しい満面の笑顔で懇願してきた。

「萌？お手本を見せてくれへんか？」

「もう！試験やないんやから。」と萌はくすくすと笑いながらも嬉しそうに準備を始める。しかし、萌がお茶を淹れる姿は、実に様になっている。座卓に置かれたポットのお湯を宝瓶に注ぎ、次に手慣れた手つきで湯呑へお湯を移すと二つの湯呑に八分目のお湯が張る。

萌は湯呑から湯冷ましへとお湯を移し、既に温められた宝瓶に手際よく小さな竹製の茶匙で茶葉を入れ、湯冷ましのお湯を宝瓶に注ぎながら、学校などの近況報告を始めた。

咲は思った。「段々と薄れつつあるけどほんまもんのお茶がある生活ってええなあ。」と。

そして、咲は感じた。萌の慈愛に満ちた表情で湯呑へお茶を注いでいる姿に、これこそが「おもてなし」、「一期一会」の心だと。

もちろん、これだけではない。萌の家の庭や部屋はいつも綺麗に管理されており、「しつらえ」も十分ではないかと改めて感じた。

萌の近況報告が終わると同時に「ほな、咲ちゃん。ぬくぬくのうちに飲んでみ？どやさ。」とお茶を湛えた湯呑が差し出された。

咲が湯呑を口元に近づけるとふわっとしつとグンツと豊かで奥深い香りが広がり、一口啜ると「え？なに？これがお茶なんツ？このお茶、好つきやわあ！」と感嘆の声をあげた。

「ほな、咲ちゃんの番やで？」と宝瓶の尻をポンポンと掌で叩き中の茶殻を取り出した。

「萌？二煎目は淹れへんの？もったいない。」

「うん。茶殻は佃煮にしてお弁当のおかずとお姉ちゃんのお酒のお供にするんやし。」

お茶の旨味がたつぷり残った茶殻を佃煮にするなんて美味しくないわけがないだろう。

「はい。咲ちゃん。急須と宝瓶、どっちがええの？」と萌がにこやかに聞いてきた。

「急須やな、つて、そんな言われましても、うち、かなんわあ。このいけず！」

そして、現在に至る。

咲は陸上で鍛えられた観察力や体内時計がある。萌のように語りで間を取りながら淹れた訳ではないが、咲をして「あんじょうでけたなあ〜！」と満足の一服に仕上がった。

お茶は無くても生きていける。しかし、あれば人生を豊かにしてくれる。二人の会話の中でこぼれる笑顔と「なんしか、お茶が好つきやし！」という弾んだ声がそれを物語る。

そんな時、「萌、咲、おる〜？」とミサの声が玄関から呼び出しチャイムと共に響く。

咲が「よっしや！ミサにもお茶を淹れてもらおか？」と言うと、萌が笑みを浮かべ答える。

「ふふふ。ミサちゃんの家って建築事務所やったよね？お家にいる時、お仕事の打合せに来るお客様へお茶出ししとつてな、それ目当てに来る人も結構おるらしいんやで？」

「えっ？ミサが？ほんまに？苦手意識を持つとつたのはうちだけか？」と咲は天を仰ぐ。

「私がどうかしたん？」ミサがやってきた。

「ううん。ミサちゃん。何でもあらへんで？」

「いやいや、外まで恥ずかしい話が聞こえよつたんよ。」と赤ら顔で口先を尖らせた。

こうして三人のお茶を交えた他愛ない、しかし、ほっこりする刻が流れ出すのだった。

作品タイトル「タイムトリップ」

作者…毛利純一郎

大藜麗と伊勢京香は居酒屋を出て、地下鉄の京都市役所前駅に向かって歩いていった。

二人ともお酒が大好きだが、新型コロナウイルスの感染防止のため、この日は一時間で切り上げたので、まだ飲み足りなかった。

地下鉄の入口から階段を下っていった。そのとき、突然、周囲が真っ暗になり、麗と京香は足を止めた。

「えっ。なに、どうしたの?」

「停電? なんぞ?」

女性なら怖がってもよさそうなものだが、麗も京香もお酒の酔いも手伝ってか、落ち着いていた。

突然、周囲が明るくなった。麗と京香は立派な御殿の前にいた。塀の向こう側から、大勢の人間の声が聞こえてきた。

地下鉄の駅に向かって歩いていったのに、まったく別の場所にいる。周囲の光景に麗と京香は目を疑った。

鉄砲が撃ち込まれた。御殿に命中し、激しい轟音が耳に響いた。

よく見ると、御殿に白い衣装をまとった侍が槍を持って立っている。凛々しい顔で立ち居振る舞いに気品がある。

「えっ、もしかして……」

「信長……」

「どうして?」

麗と京香は信長のもとに駆けよった。

「女は逃げろと指示したはずだ。早く逃げろ!」

目の前に、地下鉄の出入口が見えた。

麗と京香は信長に「ここから逃げる」ことができると叫んだが、残念ながら信長に声は届かない。

甲冑姿の多くの武士が押し寄せてきた。

「麗さん、早く逃げなきゃ」

京香が麗の手を握って歩き出したが、

「ここ本能寺よ。もしも信長さんが逃げる事ができたら、歴史が変わるわ」

麗はそう言っていると、信長に向かって「ここから逃げる事ができます。早く来てください」と大声で叫んだ。

信長は気づかなかったが、信長のそばに控える若武者が麗を見た。麗は「こつちに来てください」と若武者に向かって叫んだ。

「あれ、たぶん森蘭丸よ」

麗は目を輝かせた。

若武者は信長に何事か話したが、信長は奥の部屋へと消えていった。若武者は慌てて信長の後を追っていった。

「麗さん、早く行きましょう」

京香は麗の手を握ると走り出した。

地下鉄の出入口に入ると、先ほどまで聞こえていた武士たちの声は聞こえなくなった。

「京香さん、信忠さんが二条城にいるわ。信忠さんを助けましょう」

史実では信長の後継者の信忠は二条城で自刃する運命だ。

「麗さん、何言ってるの？」

「信忠さんは確か二条城にいたはずよ。逃げる事ができたのに逃げなかったというわ。討ち死にすることないわ」

改札に入って、ホームに行くと、ちょうど二条城方面の電車がやってきた。

二条城は二条城前駅の近くだ。京都市役所前駅から一駅だ。

「麗さん、信忠がいたのは今の二条城じゃなくて、二条御所という場所よ。場所は烏丸御池の京都国際マンガミュージアムのあたりよ」

京香はスマホの画面を見せた。烏丸御池の北西側徒歩一分と紹介している。

電車が烏丸御池に着いた。麗と京香はホームに降り、京都国際マンガミュージアムに向かった。人通りはなく、

静かだ。

「ここじゃないのかしら？」

「もしかしたら、今の二条城じゃないかしら。信長がいた本能寺は現在の場所と全然大違ったけど、今の本能寺にいたし」

京香が大きな目を見開き、麗を見た。

西の方角の空が赤く染まっている。漆黒の闇の中で赤色が威勢よく存在感を示している。

二条城が燃えている。急いで行かないと、信忠が自害してしまつ。

麗と京香は烏丸御池駅まで走り、息せき切つて改札を入った。電車がなかなか来ない。早く行かないと間に合わない。

ようやく電車がホームに着いた。走り出したと思ったら、すぐに電車はスピードを緩め、二条城前駅に着いた。地下鉄の出入口を上った。階段を上ると、暗闇の中の月明かりで照らされた二条城が見える。二条城は平穩無事な姿を見せている。

「私たち、夢見てたのかな？」

「二人とも同じ夢を見たの？」

「酔ってるのかな？」

「そうかもね……。お腹空いたわ」

「天一（てんいち）食べようか。確か、二条駅の近くにあったし」

「そうね」

麗と京香は顔を見合わせ、歩き始めた。

作品タイトル「咲号急行スペシャルスイーツ失踪事件」
作者…幻想朝顔

京都地下鉄京都駅中央1改札口

改札口を出ると太秦萌もち私は、ある少女の姿を探した。

その少女は、左右に広がるツインテールに、赤い縁の眼鏡を掛けた女子高生で、わたしの幼なじみの小野ミサである。

本当であれば、必ずこの付近にいるはずのミサがいないので、悪い考えがよぎり始めた。その時、視界の端で人が動き、その後ろからミサが見えたので、嬉しさのあまり一、二歩駆けだそうとした。しかしその動作は、ミサの後ろから現れた人物によって、足取りはスロウから完全に止まった。

その人物は、この場所に絶対存在するはずがなかった。

魔法少女の魔法や未来のロボットがポケットから不思議な道具を使わない限り、この場存在しないはずである。

そして、私は思いもよらない事態に、思わず地下街に響く声で叫んでしまった。

『咲号急行スペシャルスイーツ失踪事件』と題して、この事件の始まりを書き記したい。始まりは、私たちが何時もよく立ち寄る喫茶店でのこと。

期間限定スペシャルメニューが終わるといいう話題をしていたとき、急に幼なじみの松賀咲は突然、私に質問を投げかけた。

それは、京都地下鉄の最終駅・太秦天神川・国際会館・六地蔵の駅から一斉にスタートして、京都駅に最後に着くのは、どの列車かという質問。

私は、京都地下鉄ホームページで知った知識を披露した。

太秦天神川から京都駅までの所要時間は、19分（乗り換えの待ち時間で差がある）、国際会館駅は20分、六地蔵駅（乗り換え有り）は37分で、答えは『六地蔵駅から』である。それを聞いた咲は、「違っよ。六地蔵駅からも20分程度」と訂正した。

「ああ、JR六地蔵駅からJR京都を使うつもりね」と咲の考えを読もうとした。

「絶対に、京都地下鉄は使う条件で全て同じ時間がかかる、という話」と咲は言った。

「そんな事はない」と私は言うので、スペシャルパフェをかけて、勝負することになった。ルールは、それぞれテレビ電話で、地上にある指定された出入口標示を写しながら、咲の合図で一斉に出発して、地下鉄京都駅を目指すという簡単なルールで最後の一人が奢ることになった。

そして、太秦天神川駅は私、国際会館駅はミサ、勿論六地蔵駅は咲となった。

私は、18分差があるので、遠い出入口でゆっくりあるいてあげると、余裕を見せた。

そのため、「本乗り遅れたが、何の妨害もなく、私は京都駅についた。

これでスペシャルパフェは、ゲット！

ドーン!!(前が見えない)

私の前に、巨大なパフェが置かれた。

しかし、それをたべているのは、咲である。どうしても判らないので、答えを求めると、スペシャルパンケーキとの交換で、私たちは『十条駅まで咲号急行が走った』という答えより一層の謎をゲットした。

『分かるわけではない』

しかしこれだけでミサは分かったらしい。

「どういいうこと」とミサに質問すると、咲が止めに入った。

「前にも、よく似た話をしたのに、知らないのは、萌は聞いてくれない証拠？」といったずらっぼく言った。

「詳しい答えを教える代わりに、最後の一つスペシャルパイを奢るといふことで」と言われて、私は答えを知りたい誘惑が勝って承諾した。

『答えは簡単。まず、地下鉄六地蔵に乗らずに、JR六地蔵で稲荷まで1分で行き、そこから友達に頼んで持ってきて貰った自転車で地下鉄十条まで1分で行き、そこから京都駅まで3分で待ち時間がほとんどなしでいけばみんなと同じ約20分で、予定通り一本遅れた萌より早く着くことになる』と答えを披露した。

まんまと、咲の手のひらで、私は踊らされていたという間抜けな話で、この事件は終わるはずであった。

ところが、この事件は意外な展開をみせるのであった。

三日後喫茶店で。

この3日間で、私の財布は、ピンチにおちいていた。

しかし、咲の幸せな顔で私も満足できる。

しかし同時に、咲がパイを平らげるたびに別の感情が芽生えてくる感じがした。

咲は、この三日間すごい量のスイーツを食べながら太らないのに対し、私はその反対という嫉妬心が芽生えてきた。

「いや、感謝しているよ。萌のおかげでこの限定スペシャルスイーツを、無くなる前に、全て完食できるは思わなかったよ。ありがとう」と咲が言い終えたとき、良心的な感情より羨ましさの感情が増していき、思いもよらない事を言ってしまった。

「失ったものも有ると思わない」

「え？」

『体系とか』と小声で言った。

そうどうせ、『私はこれだけ食べても太らないタイプだから』と何時のとおりに言われるだけと思ひ、小声になってしまった。

しかし、咲を見ると、パイを口に運ぶホークは、完全に震えていた。

咲を傷つけてしまうとは思いつつ、口が先に動き、『咲、もしかして太った』と止めを刺してしまった。

咲は、ホークが口に突き刺さったまま死体のように固まった。

そして、この『咲号急行・スペシャルスイーツ・失踪事件』は咲の店内に響く叫びとともに幕を閉じた。

作品タイトル「椿探し」

作者…くまきち

もう忘れてたけれども、以前職場のイベントで彼女を見かけたことがある。礼儀正しく、自分の仕事に誇りを持っているのが印象的だった。

その彼女が今日の前の席に座っている。どこに行くのだろう。

地下鉄北山駅に着いたので、私は電車を降りた。そして彼女も降りた。

まさか行き先も一緒なのかもしれないと思つて後をつけていると、一緒だった。

声をかけたほうがいいだろうか。いや、そこまで知り合いではないし。

今日は特別寒いからか、植物園は人がまばらだった。

彼女は園内で咲く椿を熱心に見ていた。

「こんにちは」

声をかけると、彼女は一瞬だけ目を丸くして、それからこりと微笑んだ。

「こんにちは」

「椿が好きなんです」

「ええ、大好きなんです。ほら、いつもつけてるから」

彼女はトレードマークとも言える椿の髪飾りを指差した。

「太秦さんも椿を見に？」

名前を覚えてもらっていることに驚いたが、名刺交換はしていたはずだ。

「私はちよっとした気分転換ってやつです」

寒いけれど空気が澄んで天気が良い。夜には友達と四条烏丸でご飯を食べに行く予定だ。

「私は新しい椿を作りたくて、参考に見に来たんです」

なんて風流な趣味なんだろうと思っ
ていると、彼女は下げていたポシエットから紙片を

取り出した。

「ここに書いているのが、見に行こうと思っ

ている椿が咲いているスポットなんです」
パソコンで作成されたリストにはびっしりと京都の名所以外にも通り沿いに咲いている椿の場所まで書かれていた。

「全部行くの？」

思わず尋ねると、彼女は満面の笑みで頷いた。

「はい」

ちよつと面白そうに興味をひかれた。そして、もう少し話を聞きたいなと思った。

「あの、これから時間ありますか？」

彼女とたつぷり植物園を鑑賞した後、出口近くにあるカフェに入ることにした。

最近見たドラマ、この前行った展覧会、おいしかったスイーツなど他愛もない話をしているのが、思いのほか楽しい。なんとというか、彼女と過ごす時間の空気が合っているなという感じだ。

「あの、麗さん。心当たりの綺麗な椿が咲い

ているスポットはご存じないですか？」

「さっきから考えてはいるけれども、あなたが調べた分以外は知らないしなあ」

シフォンケーキを口に運びながら、私は困っていた。そこまで花に注目して生きてはいなかったからだ。

結局夕方まで話し込んでしまった、連絡先も交換してしまった。

次の企画展の構想を考えるのは楽しくもあり、とても苦しいものだ。こういう時、私の頭はフル回転でとても疲れてしまう。

企画書と参考画像のプリントアウトを見ながら、私は考えあぐねる。

目に鮮やかな赤が飛び込んだのは、自分が疲れているからではない。

「あった」

これならどうだろうと、私は仕事終わりに彼女に連絡を取った。

メールにはこう書いた。

とっておきの椿を知っています。

「ここに椿があるんですか？」

「もう知っているかもしれないけれども」

私が案内したのは常設展の展示室だ。ちよ
うど見つけた椿は、今展示していたのだ。

「別に咲いている椿でなくても良いでしょ
う？」

私が見つけた椿は、江戸時代に描かれた花
鳥画の一つで、咲き誇る椿と蝶が舞っている。

まるで花びらを張り付けたような艶やかな
赤と、色鮮やかな葉の緑が眩しい。見ようと
よっては本物の椿よりも美しいと思わないで
もない。

「こんなに綺麗な椿の絵は見たことないです」

「それは良かった」

気に入ってもらえたようでほっとした。

「ねえ、京ちゃん。椿探し以外でも、またど

こか一緒に行かない？」

「はい。喜んで」

まさか妖精と友達になるとは予想していな
かったけれど、これから楽しくなりそうだ
なと思って、私は嬉しくなった。

作品タイトル「イメージネーション」
作者..きりこかぶ

太秦萌は京都市内の高校二年生。写真が趣味でカメラを持ち歩いているが、最近、ちょっとスランプ。撮りたい写真が見つからない。

学校からの帰りの地下鉄で、鞍馬口に着くとお年寄りが乗ってきた。萌が席を譲るとその女性は礼を言い、和菓子屋の紙袋を膝に乗せて座った。白髪に紫のベレー帽がよく似合っている。幸せな人なのだろう、そう思った瞬間、ため息が出た。親友の松崎咲は陸上、小野ミサは音楽に打ち込んでいるというのに萌だけが充実していない。鞆を重くしているカメラが気持ちまでも重くしていた。烏丸御池に着くと、女性は萌に「おおきに」と礼を言って降りて行った。ふと、席に目をやると自転車のカギが落ちている。萌はカギを取ると女性を追って電車を降りた。

「あの、すみません。これ、落ちてました」

萌がカギを渡すと、女性は微笑んだ。

「おおきに。ほんまにおおきにな」

「いいえー。ほな、お気をつけて」

萌が引き返そうとすると、女性が言った。

「ちよつとだけ、ええですか？」

女性はベンチを指さして歩き出す。萌がな

んだらうと思いながらついていくと、女性は

ベンチに紙袋を置き、中から和菓子の包みを

一つ取り出して萌に差し出した。

「これ、よろしかったら食べてな」

萌が遠慮すると、女性は首を横に振る。

「明日、孫が来るよってぎょうさん買うたん

やけど、和菓子なんて食べんやろ……」

女性はため息をつくとベンチに腰掛けた。

「お姉ちゃん、高校生？」

「はい、高二です」

「あら、ウチの孫といっしょやわ」

女性の顔がほころんだ。

「いまな、アフリカの奥地に住んでんねん」

萌の頭にライオンとシマウマが浮かぶ。

「もう、二十年になんねん……ウチの娘な、
アフリカの人と結婚してん」

女性の顔が暗くなった。駆け落ち同然にアフリカに行ってしまったのだという。

「主人も私も考えが古うてね、結婚するんや
ったら勘当や！ってなっつてな、それつきりや。

あの娘も親に似てもうて気が強うてあかん」

「ほな、お孫さんとは、明日が初対面？」

「そや。娘から突然手紙が来てな、『一週間泊
めてやって』って。日本語、できるんやろか」

「お母さんが日本人やもん。大丈夫ですよ」

「そやろか、あの娘、京都は窮屈で好かん言
うて留学してな、外国にどっぷりやった……」

女性の人生は順風満帆ではなかったようだ。

人を見かけによらないものだと思つた。

「堪忍な。つまらん話に付き合わせてもうた」

女性は立ち上がると萌に微笑んだ。

「おおきに。さいなら」

女性は小さく手を振つた。

三日後、萌が学校からの帰り、咲とミサと
いっしょに地下鉄に乗っていたときのことだ。

鞍馬口で乗り込んできた乗客の中に見覚えの
ある顔を見つけた。女性も萌に気がついて嬉
しそうに寄ってくる。その横には黒人の若い
イケメンが立っていた。

「孫がな、あの和菓子を気に入ってな、お店
見たい言うもんやさかい」

「美しくて、美味しくて、驚きました」

イケメンが流暢な京都弁で話す。

「京都、ええとこです。地下鉄もすばらしい」

「地下鉄って、この地下鉄？」

咲が聞くと、イケメンはうなずいた。

「地下鉄って初めて乗ったけど、イメージネー
ションが詰まっっていて最高に楽しいです」

「イメージネーション？」

萌が聞くと、イケメンは天井を仰いだ。

「この上には普通の生活がある、彼らは僕ら
が下にいるの知らない。そう思うとワクワク
クします。なんたるドラマティック！」

「……」

ちよつと浮いたイケメンに、萌は飴玉の袋を差し出した。すると「結構です」と遠慮する。咲とミサ、女性が「おおきに」と手を伸ばすとイケメンが言った。

「えっ、二回は断るもんじゃないんですか？」

「それってブブ漬けの話？ 古風やなあ」

女性が愉快そうに笑った。孫が京都人として育てられていることに満足しているようだ。

烏丸御池で二人は降りて行った。その後ろ姿に萌はハツとして、咲とミサに声をかけた。

「先、行ってて」

あっけにとられる親友を残して萌は電車を降りた。そして二人を追って声をかけた。

「あの、写真を撮らせてくれませんか？」

萌は駅構内のコンコースで夢中になってシヤッターを切った。

二人を見送り、萌は撮ったばかりの写真に見入った。笑みがこぼれんばかりの女性と孫。

これまでを想い、これからを想った。イメージ

ネーションがどんどん膨らんでいく。

電車が来たところで咲からラインが来た。

「いちばん奥の席ゲット！ はよはよ」

「了解！」、萌は電車で飛び乗った。（終）

作品タイトル「地球の片隅で」

作者…恋する乙女

「地下鉄に乗るっ」

私の名前はゼロ。以降僕は乗車口のベンチに腰を下ろした。キャリアケースと僕。いわばクローゼットと一緒に僕は家を飛び出した。住むところはもちろん決まっていなかった。突然の事に僕自身驚いている。すると風がビュービューと容赦なく吹き始めたのである。

外はまるで赤く染まった夕刻、さすがに気持ちまで高鳴り鼓動を打ち始めました。このままどうして生活していくことが出来ようか、途方に暮れる。とその時ほどなく一本の木を見つけた。よし、ここにしよう。腰を再び下ろす瞬間がやってきた。僕はほっとした。こんな気持ちに押し出されたのは何年ぶりの事だろうと物思いにふけていた。あの頃の僕は自分の居場所がなくみんなの為に僕は存在していた。社会生活、家庭生活、その中でも僕をもっとも苦しめたのが学校でのルール。今となればそんなこととふんぞり返る様な事なのでから僕って本当にデリケートな人間だ。

そろそろ周りが薄暗く影り始めた。うとうとしていた僕は夢を見た。イカダで海を漂う僕、なぜかその棒つきれでできたイカダの上でテレビゲームに夢中だった。すると(うわあー)イカダがなんと沈みかけた。すると僕は奇跡的に助かった。誰が助けてくれたのだから不明だが生き伸びた。

(はっ)僕は目が覚めた。そっかいろいろあったもんな。学校では真面目、一通りの勉強は苦労せず卒業もした。社会生活でほどなくその試練はやってくることに僕はうすうす気が付き始めていた。何をしてもうまく行かない僕は人生を諦め、人知れず他の誰も知らない町に何を求めるでもなく、そこに居る僕はもぬけの殻になっていた。

何があっても頑なに口を割らない僕は相談した事や自暴自棄に落ち込んだことを公開もしたが人間、生きていると人には言えない悩みの一つや二つはある。理想と間違っ想像したりと暗くなるものだ。

理想を求めることはあるが、争いが無くなり、悩みがなくなったりする事がない世の中でいつしか理想を求めなくなる。それこそが人間本来の生きる姿なのかもしれない。理想は暗く、ただ光は僕を来るもの拒まず、ただ未来へ進めと照らす。理想よりも日々ののだと思う。そしてその夢はいつしか僕の心の中に消える事のない希望を与える新たな一ページに変わるのである。たしかあれは…友達に相談する僕、友達の太秦萌だ。それこそあの時助けてくれた人だった。相談相手は鏡の中の自分だった。自己完結する予定がいろいろ後悔に暮れた僕には暗やみから抜け出せない心の弱さがあった。友達ではなく僕ゼロに相談してくれた。恋の悩み。そして未来は明るくほほ笑んだ。やっとな暗やみから抜け出せた。自分で決めているんだ道なんて。うやむやの中次にあつた試練を思い出した。それは第二の人生手前に起こしていた学校生活での悲劇。口を割らない僕の性格上、ゆずれないよ、学校生活での

事にとどめておくよ。何があったかなんて言わない僕だから。そう決めたんだ。鏡の中の僕に問いかけた。僕は強い力で全力でその試練と向き合ってきた。だけど人生は僕の為に生きるんだね！（ねえ、僕！）ほどけない糸が僕の心の中で解けた。やっと来たこの瞬間。鏡の中の自分が問いかけてきた。悩みは相談しない：試練は確かに僕が作ってしまったものだが、それを乗り越えなければ未来は来ない。その試練の中でもう一人の友達四条みやび：（僕の想像上、この二人、太秦萌と四条みやびはそうとう仲良し。高校時代を共に過ごさなくとも、その二人は同高校に通う中学からの大親友だ。僕はその二人を照らす光だったのだ。途中から僕を含む友達三人で合うようになり、その試練が微笑みかけた。それでも僕は未来へと進まなくてはならない。その様な環境が整ったからである。ほどなくその試練は鏡の中へと消えていった。

世の中は変わらないが、僕は変わることができる。そんな環境で僕は今までとは異なる生活を送っている。まず、仕事に就けた。長く続いている。気持ちも楽になり休日は趣味に没頭している。その出来事を完全に忘れる事は無いが日々楽しく過ごしている。

一つに相談しないこと、二つに昔の事は忘れること。この二つを僕は守ろうと未来へ進んでいる毎日だ。だって未来は僕の為にあるのだから。

さてこの経過した過去の出来事は僕にとって苦い経験だったがこれからは強く生きていかなければならないと理解し始めた。毎日の生活で欠かせない地下鉄：僕にはもう一人紹介しておきたい人物がいる。それは僕の辛い時を支えたちーちゃん。幻聴を聞きながら生活の為に僕を支えてくれた。いわば僕の分身。耳がカレーで食するナンに似ている。風貌は男の子。今は大人になり普通の人間だ。

僕にはそんな友達が居る。現実の友人、想像上の友達など。

京都の地下鉄はとも思い入れがある。なんとか生きてきた僕は利用客だったけれど今は違う職場だから乗る必要がなくなった。

また機会があれば今度は変わった僕で乗車したいと思っている。

作品タイトル「邂逅」
作者…突貫小路

「あのっ すいませんん、太秦……さんですか」

そう言って太秦萌が男性から声をかけられたのは、とある夏の休日に姉と出かけた帰り、烏丸御池駅のホームで地下鉄を待っている時であった。

「えっと……どちらさまですか？」

戸惑う萌が口を開くより早く、姉の太秦麗が聞き返す。

「小学校の時一緒やった 堀川です。お姉さんもお久しぶりです。数年ぶりやから覚えたはらへんかも知れんですが」

全く覚えてないという顔をしている姉を横目で見ながら、萌はとりあえず

「堀川……くん？」

と言いながら記憶の糸をたぐる。やがて萌は一人の男の子を思い出していた。

*

太秦家が今の家に引っ越してきたのは萌が中学の頃のこと、それまでは中京区内に居を構えていた。萌が通っていた市立の小学校は都心の小学校の例に漏れず、児童数の減少によりお隣の小学校と合併して広い学区を擁していたが、それでもクラスは学年に一つしかなかった。そのため萌はクラス替えがないというものを経験したことがない。姉の頃にはすでに一学年一クラスだったらしいから、市内中心部の少子化が叫ばれて久しいのを実感する。

そんな具合だから、一学年で十何人しかいないクラスの中で知らない男子がいるなどということはなかった。堀川という男子がいたことも当然覚えていない。だが、萌の記憶の中の堀川はまだ声変わりもしていない小学六年生の男子である。いま目の前に現れた男性はその堀川の面影があるような気がするが、同一人物であるかと言われると肯定も否定もできないのだった。

*

堀川はその日、久々に地下鉄に乗った。

京都に住む人間はあまり地下鉄に乗らない、と言われることがある。地下鉄の沿線に住んでいるわけではない堀川も普段利用するのはもっぱら市バスで、子供のころから地下鉄は何となく縁遠い存在だった。京都の地下鉄は開業から四十年近くになるが、カタカナの力の字の如く二本走っているのみである。中学の社会の先生が「京都の地下鉄は竹べらで掘ってるからな」と話していたが、要するに掘るたびに遺跡が見つかるからなかなか工事が進まない、という意味なのだそう。実際には東西線建設の際にかかった建設費の影響というのが大きいらしいが、竹べらの話は先生のお気に入りだったらしく弟も同じ話を聞いたと言っていた。

そんな堀川が地下鉄の改札をくぐったのは地図アプリが経路検索で勧めてきたからであった。普段なら多少時間がかかってもバスだけで行くのだが、アプリが示す候補はバスのみでも乗換を要し、暑い日にはちよつと避けたいものであった。地下鉄に乗り慣れない堀川は烏丸御池の乗り換えで散々遠まわりをしたあげく、東西線の深いホームにやってきた。

東西線のホームは烏丸線と異なり全面にホームドアがある。堀川はこの閉塞感と未来感が同居する空間を嫌いではないな、と思った。ホームのまばらな人影の中、堀川は視線の先にいる二人連れの女性に見覚えがあることに気づいた。

——太秦さん……？

一クラスしかなかった小学校の同窓の中でも、太秦という女子は一風変わった子であった。好奇心旺盛、というだけなら普通だが、将来の夢の作文でいろいろな職業をいっぱい並べたてていたりしたことを思い出す。そんな太秦の話で印象深いのが、地下鉄が好き、という話である。太秦はその理由を教えるはくれなかったが、時々聞いてもない地下鉄の話を見せてくれるのだった。

東西線ホームにたどり着くだけで思わぬ苦勞をした堀川は、こんなとき太秦がいれば……などと夢想していたのだが、目の前にいる女性は髪型こそ違おうが太秦の当時の印象そのままであった。お姉さ

んのほうに至っては見た目すら変わっていない。もつとも太秦と二人で歩いているところに出会って一度会釈したことがあるだけだが……。堀川は思わず声をかけた。

*

「久々に地下鉄に乗ってみたらこんなところで太秦さんと会うとか」

そう話す堀川に萌はなお違和感を覚えていたが、その次の一言でその正体が分かった。

「なぜか地下鉄詳しかったからなあ、太秦さん……いや、そのちゃん」

(おわり)